

2020. 11. 01 第一主日召天者記念礼拝
創世記 49:29-33 「神の恵みによる葬り」

聖書

- 29 また、ヤコブは彼らに命じた。「私は、私の民に加えられようとしている。
私をヒッタイト人エフロンの畑地にある洞穴に、先祖たちとともに葬って
くれ。
- 30 その洞穴は、カナンの地のマムレに面したマクペラの畑地にあり、アブラ
ハムがヒッタイト人エフロンから、私有の墓地とするために、畑地ととも
に買い取った洞穴だ。
- 31 そこにはアブラハムと妻サラが葬られ、そこにイサクと妻リベカも葬られ、
そこに私はレアを葬った。
- 32 その畑地とその中にある洞穴は、ヒッタイト人たちから買ったものだ。」
- 33 ヤコブは息子たちに命じ終えると、足を床の中に入れ、息絶えて、自分の
民に加えられた。

はじめに

本日は召天者記念礼拝です。先に天に召された方々を偲び、その生涯を共
に歩んでくださった主に感謝の礼拝をささげたいと願っています。召された
方々は、今は主の御許で永遠の平安の中におられます。私たちも御国に帰る
とき、主にあって召された方々との再会が約束されていますから、最後まで
しっかり歩んで行きたいと思います。今日は旧約聖書に登場するヤコブの晩
年に思いを向けます。ヤコブの人生の終わりに焦点を当てて聖書を開きまし
たが、人生の終わりに表されていることは、すなわち人生のすべてではない
かと思うのです。ヤコブの一生に触れながら、人の死に見る神さまの恵みを
味わってみましょう。

1. アブラハム、イサク、ヤコブの神

聖書の最初の書が「創世記」です。創世記は神さまの天地創造から始まり、

イスラエル民族を通して神さまの祝福がこの地全体に注がれていくという祝福の出発点が記されています。その出発点に深く関わった人物として、アブラハム、イサク、ヤコブの3人が上げられるでしょう。最初アブラハムに注がれた神さまの祝福は、子であるイサクに引き継がれ、次いで孫であるヤコブに渡されました。

創世記は全部で50章あるのですが、アブラハムについては12～23章（12章分）、イサクは24～27章（4章分）、ヤコブは28～50章（23章分）が充てられています。聖書に詳しい方は、“あれ、ヨセフの人生は？”と思われた方がいるかもしれません。興味深いことに、37～50章まではヤコブの子であるヨセフの生涯が中心に描かれておりヨセフ物語として親しまれていますが、これはヤコブの歴史の中に含まれています。「さて、ヤコブは父の寄留の地、カナンの地に住んでいた。これはヤコブの歴史である。」（創世記37:1,2）と言って、ヨセフの話に入って行くのです。ヨセフの話はヤコブが人生の晩年に経験した神さまの恵みとして位置付けられ、いかに神さまが恵み深いお方かを良く表しています。後に触れますが、ヤコブの人生は本当に苦労の連続でした。しかし、晩年はヨセフによって平安な日々を与えられています。聖書の中には「アブラハム、イサク、ヤコブの神」という表現が出てきますが、神さまの祝福の流れは3人を貫くと同時に、間違いなくその一人一人にも豊かに注がれています。その代表がヤコブではないかと思うのです。

2. 人の一生とは

私たちは人の一生をどのように見たらよいのでしょうか。生まれて死ぬまでの時間をどのように見るのかということです。これは単に地上で過ごした時間を見ているわけではなく、人のいのちの存在そのものを見ていることであり、どのように生きたのかという生き方を見ているのです。仮にいのちそのものを偶然の産物のように理解している人は、人が生きた時間の意味もさほど重要ではないかもしれません。そのような理解に立って人生を見ることを否定はしませんが、自分が生きて来た時間に意味がないというのは悲しす

ぎます。

聖書は人のいのちの起源を神さまの創造に置きます。神さまがご自分の愛の結晶として造られた存在が人間であり、神さまと共に愛の中に生きるように造られているのです。余談ですが、2年前にアメリカミシガン州のハンブルク郊外の凍った湖の上に落ちた「ハンブルク隕石」から有機化合物が発見され、地球外からいのちの原材料が運ばれてきたのかもしれないというニュースを目にしました。宇宙へのロマンを掻き立てるには良いでしょうが、いのちの起源に結びつけるのはどうなのでしょう。私は、すべての人は神さまの愛によって造られた貴い作品であると信じています。それを互いに喜べる社会でありたいと願います。その願いが、先週お配りした「くびきの会」の原点です。「くびきの会」が目指すものは社会福祉事業というよりは、キリストの愛で共に生きる共生社会の構築です。興味・関心・ご協力くださる方はぜひ手を上げて頂きたいと思います。

3. ヤコブとともに歩まれた神

神さまはヤコブを祝福してくださいました。神さまの祝福の人生はヤコブの苦難の人生と一体となっています。言い方は変えれば、ヤコブの苦難の中に神さまは共におられたということです。ヤコブは兄エサウと父イサクをだまして長男の権利を奪い取りました。その結果兄の怒りを買って、伯父ラバンの下に逃げます。伯父の下では20年間の苦役が待っていました。その後、再び生まれ故郷カナンに帰ってくるのですが、その帰路で最愛の妻ラケルが亡くなります。カナンに戻った早々、娘のディナが辱めを受け、それに腹を立てた兄のシメオンとレビが復讐したことでカナン人との間に緊張関係が生まれてしまいました。それだけでも大変な人生なのに、最後は最も愛したヨセフがエジプトに売られてしまい、消息が不明のまま（正確には、ヤコブはヨセフが死んだものと思っていた）長い時間が過ぎました。そうこうする内にイスラエルに飢饉が起こり、エジプトに穀物を買に行ったら、何とそこにいたのがヨセフでした。ヨセフはエジプトの宰相になっており、ヤコブ一族

をエジプトに迎えたのです。ヤコブはエジプトで17年間過ごし、147歳で亡くなりました。亡くなる前に子どもたちを祝福して、骨はカナンの先祖の土地に葬って欲しいと言い残して息を引き取りました。実に波乱万丈な人生でしたが、その中に神さまも共におられたのです。晩年が平安であったことは救いですが、ヤコブの人生は言うなら敗北と苦労の連続です。それをもってヤコブの人生は失敗だと言うのでしょうか。そうではありません。ヤコブの人生は失敗ではなく、そこに神さまがおられたかどうかで人生の意味を決めるのです。

4. 良い人生だった

神さまは先に天に召された方々の人生の一切をご存知です。もしかしたら、ヤコブの晩年のようにその労苦が地上で報われることはなかったかもしれません。たとえ地上では報われなかったとしても、今主の御許で最高の報いを受けているのです。

「ヤコブは息子たちに命じ終えると、足を床の中に入れ、息絶えて、自分の民に加えられた。」(33節)。一人の人生が終わりました。そこには、人が生きた証とともに神さまの恵みの足跡が残されているのです。今日、私たちが知る限りにおいて、故人の足跡を辿ってみましょう。楽しかったこと、苦しかったこと、嬉しかったこと、辛かったこと、それぞれの思い出があるでしょう。それは確かに人が生きた証であり、その只中に神さまも共にいてくださったことの証です。今残された私たちは、神さまが共にいてくださることを自覚的に知ることができるお互いですから、神さまの支えの手に励まされて歩んで行きたいと願います。神さまと共に歩んで来た人生を、“良い人生だった”と言って締め括れるように祈りましょう。

まとめ

今日の礼拝は召された方々を偲ぶとともに、私たちがどう生きるのかを考える時にしたいと思います。人生の最後に、“ありがとう。良い人生だった”

と言って締め括ることができたら最高ですね。そこに、本人も周囲の人も神さまの恵みの足跡を見ることができたらさらに幸いです。昨日は「くびきの会」の関係で富山型デイサービスのリモートセミナーに参加しました。その中で一枚の写真が紹介されました。施設を利用している方が亡くなる十数時間前に家族や関係者と笑顔でお話をしておられる写真でした。家族に看取られ笑顔で地上の旅を終えて天国へと出発することができたらどんなに幸いかと思わされました。この喜びを少しでも広げて行けるように願っています。神さまの恵みに支えられた一生を共に喜べるお互いでありますようにお祈りします。